不審な主張らしきもの

庫発りべるき

本書は体験版です

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

この物語はフィクションです。実際の人物・団体・事件などとは関係ありません。

〈本編開始〉

身勝手な理由から犯罪に走る者がいる。事件が起こると犯人を許さないと批判の声がそこら中から上がる。

今も昔も、身勝手な理由から犯罪を起こす者はそれなりにいた。

その一方、自分が犯罪被害に遭うとは思わなかったと、被害発生後にショックを隠せない状況になる者も多い。

各個人で注意すればある程度は被害を防げるだろうが、どこまで有効なのだろうか――

俺は高校二年の男、現在十六歳。二〇一四年のある晴れた日の午後、帰り道を歩いていた。

電車通学ということで、これから駅に向かうところだが……なにやら物々しいことになっている様子が聞こえてくる。一体何の騒ぎだ？

そこは登下校時にいつも通りかかる小学校だった。パトカーなどの警察車両や、ソッチ関係の服装をした人たちの姿が見える。

小学校周辺には人だかりができている。

その中には俺と同じ服装をした者がいた。学校の制服である。俺の同級生の友人だ。

俺はそいつに一声掛けた。簡単な挨拶の後にこう言った。

「何かあったのか？」

「ああ、お前か」

友人は話しかけに応じた後、こう言った。

「この小学校の児童が何者かに脅されたらしい」

不審者か。全国各地で報道されるこのテの話だが…この近辺でも現れるのか。

「何でも、ここの児童にいきなり声を掛けてきて、にらみつけながら危害を加えると脅しつけてきたらしい。で、脅された児童が学校に戻ってきたようだ。

この学校の先生に知らせ、学校側から警察に通報があった」

「いつそんなことが起きたんだ？」

俺は友人に聞いてみた。

「ついさっきらしいぜ」

そんなに時間は経ってないというわけか。

「どんな奴がそんなことを…」
俺はつぶやくように言った。
「うーむ、わからん」
友人は答えた。
どうせ犯行から通報されるまでの間に逃げたのだろう。残念ながらしばらくは捕まりそうにないな。
俺は友人と別れ、心の中に不気味さを感じながら駅へと向かった。
駅のホームで辺りを見渡してみたが、見る限り特にヤバそうな奴はいない。
もっとも、見た目は普通で実はヤバイ奴だった、なんてケースも多い。油断は禁物だな。
電車への乗車から帰宅まで、特に変わった出来事は無かった。
俺は自宅でテレビを見る。ニュース番組では先ほどのことが全国規模で放送されたわけではなかったが、地方規模で放送するローカル版で報じられた。
小学三年の男子児童が学校から帰る途中、いきなり男にらみつけられて、暴力を振るってやると脅されたという。
児童はすぐに学校に戻り、教師に知らせ、学校側が通報した。
男は二十代から三十代らしい。帽子とマスクで顔を目立たないようにしていたようだ。
小学校では児童や保護者に注意を促しているという。

翌日、俺は登校するために電車に乗り、降車駅で降りる。
そこから歩いて登校する。コース上にある小学校では制服を着た警察官が立っている。
昨日あんなことがあったばかりだ。警戒モードになっているのだろう。
それから数日間、何事も無かった。
結局なんだったのか、さっぱりわからない。ただの悪ふざけだったのか。
そう思っていたところ、例の小学校に怪文書が送られてきたという。
報道によると、内容があまりにもヒドイものだったという。
文中にこんなことが書かれていた。
「この前の男の子の怖がりようは大変面白かった。楽しいのでまたやります」
何考えてんだよ、コイツ。

〈続きは製品版で〉

著者　庫発りべるき
発行　データコーディネートフォルダー
二〇一四年　五月三日

(C)　Kohatsu Riberuki 2014